

論文

人種主義的世界システムにみる
言語諸科学の「共犯性」

— 「ネイティブ—ノンネイティブ」パラダイム—

源 邦彦

1. はじめに

応用言語学、言語学、社会言語学のディスコース、そして英会話企業の広告から巷の世間話にいたるまで、英語に関するディスコースでは、「ネイティブ(native)」¹⁾概念が広く使用されている。言語学ディスコースでは、当概念は、その妥当性が十分に検討されることはなく、あたかも所与の事実として語られている(田中 2013)。英語に関するディスコースにおける「ネイティブ」概念の根底には人種主義が横たわっており、それに対する告発が現れ始めるのは、応用言語学が学問として構築され始めた1960年前後から随分と時間を経てのことである(e.g. Curtis & Romney 2010)。

言語科学における英語「ネイティブ」ディスコースの代表例としては、言語学ディスコースの影響下にありときには応用社会言語学をも包含する応用言語学²⁾(e.g. Halliday et al. 1964; Krashen 1982; Selinker 1972)、主に一言語のみを用いる「ネイティブスピーカー」に科学的権威を付与する言語学(e.g. Chomsky 1957, 1965; Pinker 2007)、それら両分野に根強く残る言語純粋主義の脱構築を図り、また、第一言語習得・運用と差異が認められる第二言語習得・運用に否定的解釈を与える傾向にある応用言語学の認識論を脱構築する一方で、両分野の概念や枠組みの多くを踏襲する世界諸英語論(e.g. Smith 1976; Jenkins 2015; Kachru 1982)がある。これらの研究領域は、本質主義的な多文化主義とも合流し、言語の「ネイティブ」的地位は、侵すべからざる言語権の中核に位置づけられ(e.g. Rannut, et al. 1994; Skutnabb-Kangas & Phillipson 1989)、言語科学ではこれ以上の議論を受け

入れる余地がないほどに神聖化されている。しかしながら、言語科学が構築した「ネイティブ」ディスコースこそが、それと対置される「ノンネイティブ (nonnative)」と呼ばれる人々、さらには「ネイティブ」の下位集団である非白人諸集団³⁾の言語権、人権を侵害する事態を招いている (Baugh 1983b; Braine 1999; Nero 2010)。とりわけ、「ネイティブ—ノンネイティブ」パラダイムは、非白人諸集団を経済政治的に搾取する社会構造の維持、再生産を可能にする。事実、「ネイティブ=白人」「ノンネイティブ=非白人」という認識は社会に蔓延している (Curtis & Romney 2010; Kubota & Lin 2006)。その結果、とくに非白人集団に属する英語教育関係者がその二項対立自体を問題視するようになっている (e.g. Liu 1999; Nero 2010; 大平 2001)。

本稿では、言語科学の下位領域 (さらにその中の小領域) —応用言語学 (言語習得プロセス)、言語学 (変形生成文法)、社会言語学 (世界諸英語) —に横断的なある特定のディスコース、すなわち「ネイティブ—ノンネイティブ」パラダイムが、支配人種集団の経済政治的目的を隠蔽する「カラーブラインド」ディスコース (Bonilla-Silva 2001) として機能している可能性を論考する (cf. Scheurich 1997)。言語科学全体あるいは下位分野全体の傾向を論証し、深く切り込んだ議論はできないが、「ネイティブ」諸国で生産された、時には相反目し、時には相互依存関係にある第二言語習得論、変形生成文法論、世界諸英語論が、互いに「共犯」関係にある可能性を提起したい。

2. 科学と支配

政策決定は政府組織等が執り行うものであり、私の考えでは、我々はこの点に関して役割を演じることはない。(Center for Applied Linguistics (Charles A. Ferguson) 1959: 182)

文法は言語の理論である。それは、理想化されたネイティブスピーカーの生得的能力を正確に記述する限りにおいて記述的に妥当といえる。(Chomsky 1965: 25、イタリックは原文、傍点は筆者)

言語学は誇りをもって記述科学であることを宣言する (Haugen 1966: 52、傍点は筆者)

言語学者は人間の言語能力と言語知識の記述を試み、体系間の優劣を規定することはない。(中略) 全科学者にとっての最重要事項は、観察する事実を記述し説明することであり、それを^変えることではない。(O'Grady et al. 1993: 5、傍点は筆者)

以上の文言は、言語科学の大前提としてしばしば語られ、言語を研究する者にとっては馴染み深いものであろう。応用言語学者チャールズ・ファーガソン、言語学者ノーム・チョムスキー、社会言語学者アイナー・ハウゲン、言語学者ウィリアム・グレイディによる発言である。これら引用文の共通事項は「事実」の「記述」である。しかしながら、特定の言語や変種の選定と境界線の設定、名称、表記法、分析概念や専門用語の選択や構築、データの選択・収集・分析・解釈においては、社会一般と言語学者自身による信念、経験とその経験の解釈、経済政治的利害関係が影響し、何らかの主観的、イデオロギー的影響が作用することは避けられない(Canagarajah 2013; Minamoto 2017; Scheurich 1997; Smitherman 2000)。その結果、特定の経験を有する学者による特定の認識、信念、イデオロギーから出発し、特定の視座から「記述」したその対象は決して絶対的かつ客観的「事実」にはなり得ず、必然的に構築あるいは想像、すなわち「規定」された存在となる。特に、応用言語学、言語学、社会言語学に広く影響を与えたチャールズ・ファーガソンは、応用言語学を極力非政治化しようと試みる。とこ

ろが、この応用言語学自体が英米の経済政治プログラムの一環として構築され、主として英米の経済政治的支配に益する論理と実践を構築、提供してきたという歴史がある (Phillipson 1992)。国家の開発や統合、すなわち支配のために言語 (教育) 政策は実施されるものであり、社会的営為のために言語は存在する (Cooper 1989)。経済政治プログラムの一部である言語教育を理論化し、実践に移す段階で自らの役割が非政治的なものであると主張することは、自らの分野の存在意義・基盤を否定することになる。これらの言語科学者は、全員が人種ヒエラルキーの頂点にある白人集団に属し、彼らの「ネイティブ」変種は自ら可視的に「規定」せずともヘゲモニーにより普及、維持できる立場にあるという点で一致している。被支配人種集団とは異なり、自身の変種のコーパスやステータスの公的保護を謳い、学問的ディスコースの中で感情的あるいは政治的主張を行う必要に迫られていない。「記述」や非政治性という一見合理的、客観的ともとれる主張が可能な立場にいるに過ぎない。この非政治化の試みは言語科学の随所でなされ、被支配人種集団に属する言語科学者にも内面化され、「ネイティブ—ノンネイティブ」パラダイムもその代表的な一例であるといえる。

言語科学では、生まれながらに習得、使用している言語や変種の能力、その習得プロセスの解明といった、一見非政治的とも認識され得る目標が掲げられる。一方で、そのディスコースは第一言語としての英語変種、すなわち「ネイティブスピーカー」変種とその習得過程を絶対化する機能を持つ。実際、言語学、応用言語学、社会言語学における研究成果は、「ネイティブスピーカー」の科学的優位性、間接的には、経済政治的、社会的優位性を確立することに収斂している。そして、議論はここで終わらない。実は問題はここからであり、英語に関して標準的「ネイティブスピーカー」という場合、そこには人種的要素が絡んでいる (Braine 1999; Kubota & Lin 2006; Liu 1999; Nero 2010)。これらの分野で「記述」対象として英語「ネイティブスピーカー」が選定される際、英米等の白人中心社会の上層、中

層階級の白人が選択される傾向にある。もちろん、ポリティカルコレクトネスの観点から黒人やラティーノの同じ変種の使用者を含むこともあり得る。しかし、この人々がモデルとして習得し使用しているのは歴史的にみて基本的には白人上層、中層階級の変種であることは明白な事実であり、本質的には白人社会の支配構造の維持に貢献していることに変わりはない。また、アジア、アフリカの、英語を言語レパートリーの一つとして使い分ける人々、あるいは英語のみを使用する人々であっても、それらの人々が「ネイティブスピーカー」として研究対象、検定試験のサンプルとなることはほとんどない。ある特定の習得プロセス、使用言語の数、使用範囲・頻度など特定の解釈を可能にする程度の差でしかない状態を絶対化し、特定集団の経済政治的利害を隠蔽する論理で非白人諸集団の大多数を巧妙に排除できる（ただし、白人研究者の多くはこのような利害関係を意識して研究行為をしているわけではないであろう（Bonilla-Silva 2001））。このような変種選択の方法だけをとりても、ここには特定集団の経済政治的、社会的影響が見え隠れしているのである。実際、今日の世界を支配する白人至上主義社会に直接、間接的に属する言語科学を構築してきた研究者によって使用されているさまざまな概念、定義、理論、方法、解釈などは、非政治的なディスコースとして語られながらも、結果として白人社会とその恩恵に与る少数の非白人の人々に有利に機能するものがいかに多いかを知らされる（cf. Bonilla-Silva 2001; Delgado & Stefancic 2017; Phillipson 1992）。このような支配集団による支配のための知識生産は、以下社会学者、人文科学者が指摘するところである。

支配階級のアイディアは、どの時代においても支配的アイディア（中略）となる（中略）新階級集団は（中略）その目標を達成するだけのために、自らの利益を社会の全成員に共通の利益として描くことになる（中略）それ [新階級] は自身のアイディアに普

遍性を与え、それらを唯一の合理的かつ普遍的に正当なものとして表現することになる。(Marx & Engels 2001 (1846): 92, 94)

科学者は、文字通り自身の世界を構築しているのであり、それを記述しているだけではない(中略)科学が大きな個人的執着を伴う知的作業であることに間違いはない。(Krohn 1980: xii, xix)

学問分野は(中略)社会的空白の中で生じるものではない。それらは、特定の諸利益と目的を果たすために出現する(中略)個別の概念範疇は、それを構築する人々の諸利益と目的から切り離すことはできない。(Horn 2007 (1997): 412)

すべての研究は権力—だれがそれ[権力]を所有し、だれが所有しないか—と、研究に基づいて現実を構築するための権力の行使に関連する(中略)すべての研究は政治的であり、特定のイデオロギー的立場に由来する(中略)研究の「客観的」を主張する立場自体もイデオロギー的立場を表す。(Smitherman 2000: 8)

支配集団のフレームワークはマスターフレームワークとなる傾向があり、すべての人種主体のイデオロギーがこのフレームワークに基盤を置く。(Bonilla-Sylva 2001: 9)

客観的眞実(中略)少なくとも社会科学と政治学には存在しない。これらの領域では、眞実は支配集団の目的のために創出される社会的構築物である。(Delgado & Stefancic 2017: 104)

知識の生産と支配の関係は、古くは19世紀、人種よりは階級に重きを置く

思想家・経済学者カール・マルクスが指摘し、その後、社会学者ロジャー・クロン、歴史学者ジェラルド・ホーン、言語学者ジニーバ・スミーザーマン、社会学者エデュアルド・ボニラ＝シルバ、法律学者リチャード・デルガド、ジャン・ステファンシッチなど、多分野、多人種にわたって議論されてきた。たとえば言語に関する科学知識の生産には、人種や階級などさまざまな属性が交差した支配集団、すなわち白人男性エリート層 (Scheurich 1997) が政治組織や経済関連諸団体を通じて、自集団に利する領域やプロジェクトに限定して資金を提供してきた (Arrove 1980; Rojas 2007)。支配者層による特定言語変種に対する認識や信念を、この人々の利害を反映させた科学という権威的知識体系、すなわち言語学へと昇華させたのである。この普遍的、客観的、非政治的役割を与えられた知識体系は、支配者層の言語と非支配者層の言語の関係を経済政治的権力構造の中に規定し、政策に反映され、人々の認識の中にも組み込まれることになる。そして、その知識は生産された国・地域を越え世界的な影響力を持つに至る (Skutnabb-Kangus & Phillipson 1989)。言語科学を含む今日の科学は、18世紀以降常に白人社会に利するディスコースの構築に腐心してきたこと (Smedley & Smedley 2012)、今日の人種主義がより巧妙で認識され難い「文化的人種主義」 (Skutnabb-Kangus & Phillipson 1989) であることを理解する必要がある。

3. 「ネイティブ・ノンネイティブ」パラダイムと人種

本稿の目的は、英語を扱う言語科学のいくつかの下位分野のさらにその一部の議論に、白人の利害関係がどのように立ち現れているのかを考察し、今後の詳細な論究課題としてそれら下位分野の「共犯性」を提起することにある。本章では、支配社会（特に白人社会）が被支配社会（特に非白人社会）との経済政治的、社会的差別化を図るべく構築されてきたと筆者が仮定する応用言語学、言語学、そしてこれら伝統的な言語科学では言語的

正当性を否定されていた「ノンネイティブ」変種の正常化に貢献してきたとされる社会言語学の、これら三つの領域に通底する「ネイティブーノンネイティブ」パラダイムを論考する。

3. 1. 応用言語学—言語習得プロセス

「第二言語」や「外国語」としての英語教育を扱う分野として出発した応用言語学は、個人の試みとしては1940年代に遡るとする解釈もあるが（e.g. Howatt 1984）、組織的な試みとしては1960年代に起点を設ける場合もある（e.g. Phillipson 1992）。両解釈共に、第二次世界大戦後のアジア、アフリカにおける新たな支配体制を模索する動きが白人社会で出ていた時代であったという点で一致する。言語支配と経済政治支配との密接な関係を考慮するならば、そのような国際環境下で、英米の慈善財団、政府機関、政府外郭団体、高等教育機関が協働で全世界的な英語普及政策を実施し、英語教育を理論化、科学化し、それを言語学権威と紐づけ、商品としての英米英語、英米大学で構築される英語教育理論、英米教員等の権威化を本格化させたことは、決して偶然ではないことがわかるであろう（Phillipson 1992）。

この社会変動の一つの帰結として、1961年にウガンダのマケレレ大学で「第二言語としての英語教育に関する会議」が開かれた。そこでは、英語教育の今日的教義と化した以下五つの信条が示された。

- 1) 英語は英語のみで教えることで最善の効果が得られる
- 2) 英語の理想的教員はネイティブスピーカーである
- 3) 英語は早い段階で学校に導入されるほど良い結果が得られる
- 4) 英語がより多く教えられるほどより良い結果が得られる
- 5) ほかの言語の使用頻度が上昇すると英語の水準が低下する

(Phillipson 1992: 185)

参加した学者集団はこの会議、そして英語教育研究自体の非政治性を強調したが (ibid.)、上記五つの信条を見る限り、決して非政治的とはいえない側面がある。まず、1)、3)、4)、5)すべてが2)に収斂し、非欧米社会とその諸言語を蔑む姿勢も関与し、基本的には英語以外の能力を有しない「ネイティブスピーカー」をモデルそして教員として理想化している (e.g. Quirk 1990)。特に3)は、言語学におけるスピーチ優先イデオロギーから派生したものである (Phillipson 1992)。すなわち、言語習得は自然なコミュニケーション環境で子供が言語を習得するプロセスに倣うべき、つまりより早い段階で習得すべきであるとするイデオロギーである (e.g. Halliday et al. 1964; Krashen 1982; Selinker 1972)。これは、子供が習得する変種とある一定年齢以上の者が習得する変種に差異を見出し、臨界期仮説等を介すことで、インフォーマルで限られたレジスターの、スピーキング中心の言語能力しか有しない、音韻的側面において模倣能力が高い子供、すなわち、この習得プロセスを経た「ネイティブスピーカー」を優位に位置づける (その結果、専門職など高収入職で活躍する非白人系の人々の多くが文法学習やリーディング中心の教育を通じて効率的に学んだ、特に音韻上母語の影響を受けた書き言葉中心のアカデミックな言語能力を劣位に位置づけることが可能となる)。この研究領域の一部では「言語権」への意識が高く (e.g. Skutnabb-Kangas & Robert Phillipson 1989)、「経済政治的、社会的権利の行使の媒体としての生来の所有物としての母語能力」という意味合いが加わり、第一言語習得プロセスが絶対的地位へと昇華されていることも関係しているかもしれない。いずれにせよ、ここではすべての「ネイティブスピーカー」諸集団が含まれるわけではない。英米国内の非白人諸集団の多くは、私生活では別の変種や言語を使用し、理想化された変種を使用する「ネイティブスピーカー」からは除外されてしまう (cf. Richards 1972) ⁴⁾。もちろん、非白人諸集団でも社会的上昇を果たし、白人社会に限定的あるいは表面的には参加を許される少数の人々は、同じあ

るいは類似した言語習得プロセスを経ており、この理想的な「ネイティブスピーカー」となり得る。しかしながら、この人々の変種が直接的、間接的に白人変種を規範としてきたことに変わりはなく、現時点ではそれを白人性と切り離すことは不可能であろう。以上の言語習得プロセスに基づく「ネイティブスピーカー」至上主義は、多言語使用がより一般的であるとされているアジア、アフリカの非白人諸集団にも当てはまり、第二言語、第三言語や外国語として英語を使用する社会として、基本的には「ネイティブスピーカー」枠から除外される。このように、幼少期に特定の一言語を習得するプロセスの神聖化は、大多数の非白人諸集団を除外する機能を有している。また、これと不可分とされる「言語—文化」一致論によって、白人中層、上層階級の文化を「ネイティブ」変種の背景文化として規定し、特定の変種に加え特定の文化・行動体系にも同化しない限り、理想的な「ネイティブスピーカー」枠から除外されることになる (Phillipson 1992)。そして、言語習得は特定の習得プロセスを経て、基本的には一言語、一変種を使用する人々（厳密には、その中のさらに特定の集団）の言語能力を目標と定める言説が横行している。これは、英語以外にも該当することではあるが、おそらくは世俗的認識と信念を出発点とし、所与のこととして捉えられている。すべての国・地域に当てはまることだが、多言語使用者の言語能力は、機能的、構造的にも、また、習得プロセスの面からしても多様であり、特定の能力を絶対視することは不可能である。つまり、この理解に立てば5)は成立しないことになる。

以上の応用言語学における英語教育に関する科学的、権威的知識の構築は、その商品自体、すなわち、英語自体の科学的、権威的知識の構築を前提としてきた。しかしながら、1960年前後は英語という商品自体の「記述」が十分ではなかった (Phillipson 1992)。そのような認識に基づき、英米政府諸機関や慈善財団は英語普及政策実施と応用言語学構築に加え、支配集団である白人（とくに中上層階級）の言語習得過程そして変種を権威化、

普遍化する言語学理論を誕生させることになったのである (cf. 石川 2017)。

3. 2. 言語学—変形生成文法

1960年前後、英米両政府は世界的な英語支配を目指し協働し始め、政治、経済、教育関連諸組織が一丸となって白人至上主義社会科学の牙城を構築していた (Arnové 1980; 源 2019, 2020; Smedley & Smedley 2012)。ちょうどその頃、変形生成文法で言語学界を一世風靡したノーム・チョムスキーは、まずは *Syntactic Structures* (1957)、その数年後、米国社会言語学が誕生した同一時期に *Aspects of the Theory of Syntax* (1965) を出版した。同時代の教育学、社会学、心理学、社会言語学など同様に、他国や他集団を科学知識、資本、武力等によって経済政治的に支配することを企てる経済、政治諸組織、とくに国防総省の支援を受けてのものであった。もちろん、国防総省や企業によるコンピューター技術への応用、また、それまで支配的だった構造主義、行動主義言語学への挑戦、といったものがチョムスキーの理論を可能にしたという見方もある (Newmeyer 1988)。その一方で、この時期は、アメリカ国内での人種隔離政策違憲判決 (1954)、アフリカの年 (1960)、有色人種の世界的連帯により白人至上主義に宣戦布告したバンドン会議 (1955) など、黒人やその他の非白人諸集団の権利要求がアメリカ国内ばかりでなくアジア、アフリカにおいても高まっていた。まさにこのような時期に、欧米白人社会は、社会政策 (McGrew 1997) や科学 (Smedley & Smedley 2012) によって新たな支配構造を構築し始めたのである。たとえば、心理学や社会学は白人と非白人の文化的差異を脳という目には見えない領域で「正常—異常」二項対立として解釈し、社会科学を自然科学化しようとした。まさに同時期に、同じく社会科学を自然科学化するチョムスキーの研究によって「正常」なあるいは「標準」的な言語能力が理論化され、国家関連諸機関 (慈善財団も含む) によってその知識が国内外に普及せしめられた社会背景を留意する必要がある⁵⁾。この時代は、

英米両国政府が、英語を世界的に普及し、英語教育を科学化する中で、現代英語の言語学的「記述」—科学的権威化—の後進性を憂慮していた時代でもある (Phillipson 1992)。言語学という近代制度の一つを利用し、特定集団の言語変種の「記述」によりそれに科学的権威を与え、国家制度を通じ特定変種の地位を所与のものとして位置づける行為は、世界各地で見受けられる現象である (e.g. Lange 2010; Poliakov 1971; 安田 2004)。

英語自体、その「記述」の応用、そして英語能力・習得・使用に関する科学的知識が求められる中で、変形生成文法論は、応用言語学に基礎科学としての知識と権威を提供する役割を果たしてきたといえるかもしれない。実社会の言語データから見出される特定文法の構築に加え、さらに心理学、遺伝子学等とも関連する目視できない文法規則を構築、換言すれば、特権集団の言語変種体系を想像する機能を果たしてきたのである。実際に、チョムスキーは1965年の著書で英語の「ネイティブスピーカー」を絶対化する以下三つの重要な考えを提示している。

- 1) 言語習得モデルとして、子供は与えられた言語的インプットから内的規則体系を構築することを可能にする先天的素質を有する
- 2) その内的言語能力は適格な文と逸脱した文を弁別する
- 3) その弁別能力、文法性と容認可能性を判別する能力は、完全に均質なスピーチコミュニティの理想的なスピーカー・リスナーの直感にある

ここで最も重要な点は、チョムスキーの言語理論が、応用言語学の主要テーマである言語習得プロセスと結合し、生まれながらに習得した言語を使用する「ネイティブスピーカー」を「記述」対象に定めていることである。子供が生後数年の間に習得する「文法」を「完成」であると形容し (e.g. Labov 1969)、「ネイティブ」を神格化する。この神格化は、彼の統率束縛

理論、極小主義理論にも受け継がれる (cf. 町田 2011)。個別言語の獲得を「成功」に導く初期状態として子供の言語獲得プロセスを絶対視し、このプロセスを経た者が文法性と容認可能性を判別する能力を有することになる。これに「単一言語使用者」という条件が加わると、家庭、コミュニティーや学校教育において英語以外の言語を初期段階で学び、英語を複数言語の一つとして使用する多数の非白人諸集団が除外されてしまう（理論上は、英語以外を主要言語とする欧州の白人も除外される）。また、英語のみを用いる人々に関しては、「ネイティブ」の「直感」を頼りに、本来境界線が曖昧な言語、より正確にはその一部（変種）を「文法性—非文法性」に基づき境界線化—体系化—し、他の部分（変種）をその体系から排除する。「理想」かつ「適格（＝標準）—逸脱（＝非標準）」という尺度で、文法性判断の基準として選択される変種—特定白人集団の変種とその変種を規範として使用する（せざるを得ない）非白人諸集団の一部の人々の変種—から言語的にある程度の距離が認められる、多数の非白人諸集団、少数の白人によって使用されていると解釈される諸変種を「逸脱」として除外する。たとえば経済的に貧しい地域に集住する「ネイティブスピーカー」である黒人やラティーノなどが使用する変種が（かつては中間言語と位置づけられた (e.g. Selinker 1972)、非標準変種として除外される (Baugh 1979; Richards 1972)。これは、「主流社会で使用されていない非標準英語のネイティブスピーカー」として、言語学に根付いた人種概念に依存しないディスコース—「カラーブラインド」ディスコース (Bonilla-Silva 2001)—が用いられていることで巧妙に執り行われる。チョムスキーは、「ネイティブスピーカー」概念には用語上の問題しか存在しないことを主張するが (Chomsky 1965)、言語科学で無批判に使用される概念や用語は、その多くが特定集団の経済政治的利害とは切っても切り離せない関係にあることを忘れてはならない。

3. 3. 社会言語学—世界諸英語論

英米の応用言語学、言語学と歩調を同じくして、国家機関、慈善財団からの助成により1960年代に新たな研究領域として急成長したのが社会言語学である (e.g. Labov 1969; Labov et al. 1965; Stewart 1965; Fishman et al. 1968)。当時の社会言語学は主に白人以外の人々が用いる英語変種や諸言語を研究対象とし、とくに前者については「逸脱した非標準語」として扱っていた。私生活を除く教育や経済等の公的生活では適性に欠くという論理に基づく (源 2019)。今日では黒人ことばのことを「非標準語」とは呼ばなくなってきているが、間接的には「非標準語」と位置づけており (e.g. Alim & Smitherman 2012)、黒人ことばを公的な場面から除外するディスコースは健在である (e.g. Rickford 2005)。この「公—私」二項対立は、社会言語学全般そして世界諸英語論にも浸透している。どの言語もどのような使用にも耐え得る言語であるという、言語学で時折語られるテーゼは忘れられているのであろうか (cf. Cooper 1989)。さらには、白人以外という理由で「ネイティブ」雇用枠から外される問題についてはほとんど議論されていない (Nero 2010; Kubota & Lin 2006)⁶⁾。現在も英語の所有権は白人にあることに変わりはない。

世界諸英語論の使命は学術界、経済界、政界等社会全般に蔓延する「ネイティブスピーカー」信仰を打破することにある (e.g. Kachru 1982; Kirkpatrick 2007; Jenkins 2015; Smith 1976)。世界諸英語論は、それが批判対象とする伝統的な言語学が構築してきたディスコースの一部「内心円 (Inner Circle) — 外心円 (Outer Circle) — 拡大心円 (Expanding Circle)」(Kachru 1992) の平等化を試みる。このモデルは、学問的中心地である欧米社会から周辺社会であるアジア、アフリカに至るまで全世界で消費され、「学問帝国主義」(Galtung 1980) は社会言語学にも浸透している。世界諸英語論の知識体系は「ネイティブスピーカー」神話を論駁することを目指し、「ネイティブ」と「ノンネイティブ」の権力関係を批判的に論じる場合もある

(e.g. Braine 1999; Kubota & Lin 2006; Liu 1999; Phillipson 1992)。その一方で、言語の定着度、標準化度という連続的で曖昧な部分に境界線を引き、序列を示唆する上述のようなカテゴリーを用い並置している点、「[・]ノンネイティブ」という否定的相対カテゴリーの付与、この複数のカテゴリーの差別化自体が「ネイティブーノンネイティブ」を序列化する。この図式の表層だけを見ると、英米等の非白人諸集団も「ネイティブスピーカー」としての地位を認められていると解釈できる。しかし、それ以外の「ノンネイティブスピーカー」のカテゴリーに入れられた世界人口の約七分の六 (*World Population Prospects 2019*に基づき推定) にあたる非白人諸集団は否定的なカテゴリーを与えられることになる。類似した諸言語・変種を用いるヨーロッパ系白人諸集団の「ノンネイティブスピーカー」は差別を受けない (Richards 1972)、より厳密には相対的にそれが少ない一方で、非白人諸集団の「ノンネイティブスピーカー」に対する中傷は枚挙にいとまがない (cf. 本名 2006)。世界諸英語論は依然「ネイティブーノンネイティブ」の枠内で展開されるものの、最近になってようやく「ネイティブ」の人種階層化が注目されるようになってきた。しかしながら、「ノンネイティブ」の人種階層化に着目した研究は筆者の調べた限りでは存在しない。世界諸英語論が現れ始めた1970年代後半は、ほぼアジア、アフリカの諸変種のみに関心が向けられ (e.g. Kachru 1982; Smith 1976)、それ以降も、差別される変種としての議論対象はアジア、アフリカ諸変種であり、内容構成はこれらの地域に集中している (e.g. Jenkins 2015; Kirkpatrick 2007)。英語の多様性と差別の問題として、「ネイティブーノンネイティブ」二項対立と同じく深刻な問題である「人種」がほとんど注意を向けられていないのはなぜだろうか。世界中の諸英語の真の意味での正当性と平等性を確立するのであれば、「ネイティブ」「ノンネイティブ」概念自体を脱構築するばかりでなく、英語の普及史や普及度、言語習得プロセスの違いといった客体化、非政治化、非人種化された論理も脱構築しなければならない。

世界諸英語論は、世界各地の変種を「記述」する際、理念として、各地域変種の「標準語」（ときに、クレオール言語学の用語として「上位語 (acrolect)」(Stewart 1965; Bickerton 1975) とも呼ばれる)、そして、それらの各「地域標準」の上位概念として「世界標準」なるものを定める場合もある (e.g. McArthur 1998)。たしかに、この「標準語」という名称は人種概念を回避できる用語として言語科学、心理学、社会学などでは広く使用されている。ところがその実態は、白人変種に基盤を置くことになりはならず、英語「ネイティブ」である白人諸集団を優位に置く論理にすぎない。

一見すると英米等の白人諸集団の既得権益を損なうような世界諸英語論が、なぜ白人社会で誕生し、白人学者によって広く支持されているのであろうか。考えられる理由の一つは、この分野のディスコースが、欧米社会で築かれた学問規範に則り、言語学の枠内で構築されているという点である (Kubota & Lin 2006)。そして、もう一つの可能性は、英語の世界的普及を支える人種差別構造を批判するためのフレームワークや概念範疇を、基本的にはこの分野は採用していないという点である。たとえば、当分野の第一人者の一人で、これまで分野内の巨匠を誕生させてきた政府と有力財団による社会言語学プロジェクトに関与し、一方で、欧米白人社会の人種主義を経験してきたはずのインドを出自とする故ブラジ・カチュルーは、今日の英語教育の問題を以下のように解釈する。

我々の職業は、自らの職務に対する、かねてからの福音主義的で、非常に自民族中心主義的な (ethnocentric) アプローチから抜け出せてはいない (Kachru 1985: 29、傍点は著者)

カチュルーは欧米社会で構築された科学ディスコースを内面化しているようである。とくにアメリカの言語学者を含む人文科学、社会科学に携わる

人々の多くにみられる「カラーブラインド」ディスコース (Bonilla-Silva 2001) を用いていることに注目したい。世界諸英語の問題が多分に人種主義に起因することは明白であるが、カチュルーは、アメリカの多くの白人学者と同様に、政治的に正しい代替範疇「民族性、あるいは、エスニシティー (ethnicity)」 (Miles & Brown 2003) でこの現象を捉えようとする。これは、人種さらには民族を捨象し集団カテゴリーとして階級を強調した、あるいは、それらを階級の下位範疇として矮小化したアメリカ社会言語学を構築した白人言語学者 (e.g. Fishman 1970; Labov 1969) のディスコースを踏襲したものと考えられる。確かに民族も有効な概念ではある。しかしながら、同時に人種概念が動員されない限り、とくにアジア、アフリカの人々が被る言語差別の根本的理解と解決を導くのは難しいのではないか。なぜなら、世界の社会構造は大きく人種によって階層化され、差別の多くが不可視的に執り行われているからである (Bonilla-Silva 2001)。言語学に社会的要素を取り戻すべく生まれた社会言語学ではあるが、その出だしにおいてディスコースの礎を築いたのは支配集団である白人学者集団であり (源 2019; cf. Aronov 1980)、その社会的要素から白人至上主義的社会構造の維持には都合の悪い部分を捨象したディスコースが築かれているのである (cf. Scheurich 1997)。たとえば、被支配人種集団が用いる諸変種の正当性を確立すべく誕生したはずの米社会言語学は、その諸変種 (当時は「非標準方言」と呼んだ) を言語的には体系性という点で「標準変種」と同等であると主張し、社会的には同等であるとは見なしてこなかったのである (e.g. Labov 1969; Baugh 1983a; Rickford 2005)。

4. 被支配人種集団に資する言語科学の構築に向けて

「ネイティブ—ノンネイティブ」パラダイムは、科学的ディスコースばかりでなく日常においても所与の事実として君臨している。この二項対立から生じる諸々の差別は、おそらくは現代の司法においてさえ差別とは判

断されることはない。この二項対立とそこで使用される概念範疇は、特定人種集団を経済政治的に特権化する巧妙なディスコースを構築している。残念ながら、多くの有益な情報や視座を提供してくれた、言語科学の枠を超えた包括的な観点から英語支配の構造分析を試みたロバート・フィリップソンも、特定人種を特権化するディスコースを克服できてはいない。英米で構築された言語学ディスコースを、基本的には「民族」中心主義の枠組みで議論する結果、著者自身が身を置くヨーロッパ非英語系白人社会での英語支配とアジア、アフリカ社会での英語支配を同じ土俵で扱ってしまっている。フィリップソンを含め多言語主義を掲げるヨーロッパ系学者が主要言語として用いる諸言語の多くは、語彙的にも、構造的にも、文化的にも英語に近く、習得しやすく（鈴木 1999）、アジア、アフリカの人々と比べ遙かに経済政治的に英語支配の恩恵に与っていると見える。「民族」概念で人種差別構造の分析を試みるこの多数派学者の論理では、遙かに経済政治的に恵まれた欧米白人社会と遙かに多くが貧困に喘ぐアジア・アフリカ社会との差異を隠蔽してしまうことになる。これでは、人文・社会科学に従事する多数派の学者、とくに、白人男性集団が構築した準拠枠を再生産しているに過ぎない（Scheurich 1997）。これら個々人の白人学者は、いかに白人による人種主義を弾劾しようとも、権力と資源の不公平な分配を可能とする人種主義的社会構造の恩恵に与っている以上、その構造によって制約を受ける学問的認識から免れることはできないのである（ibid.）

欧米白人社会を発祥とする今日の言語科学は、非政治化されたカテゴリー、用語、名称、基準等を多く使用する。その知識体系を社会に還元する責務を負った言語科学者は、その非政治化イデオロギーこそが、特定の「ネイティブスピーカー」の経済政治的、社会的優位の維持に貢献する論理を提供していることを認識する必要がある。これまでのように「言語学」として構築された科学イデオロギーの中に安住すればいいというものではない。帝国形成や国家形成における特定集団の権力形成の一環として世界

各地で行われてきた文法体系の構築史を振り返るといいだろう (e.g. 1492年アントニオ・デ・ネブリハによるスペイン王室へのカスティリャ語文法の寄進、明治の国家形成期の日本語文法の構築など)。現代の言語科学で生産された知識体系は、被支配集団の利害にもある程度は一致し、人々が内面化した信念やイデオロギーを利用することで、すなわちヘゲモニーを通じて支配集団の利害に資するよう構築されてきた史実を忘れてはならない。その知識体系は、特に「記述」イデオロギーの下、今日の支配体制の根幹である国家主権を脅かさない議論に終始する傾向にあることを認識する必要があるだろう。

被支配集団の科学者でさえも (少数エリートとして支配集団と利害がある程度一致する)、この点はなかなか批判的に認識ができていない、あるいは認識していても、科学倫理イデオロギーのために自身の議論を「政治化」することに尻込みしているのかもしれない。英語の「ネイティブ」支配からの脱却を目指す世界諸英語論の第一人者ブラジ・カチュルーでさえも、科学や教育を経済政治的権力、感情や主観性から切り離すことが、真に科学や教育に資するものであると主張している (Jenkins 2015)。これこそが、科学や教育という近代諸制度を通じて覇権拡大・維持を円滑に行えるよう白人社会が構築してきた科学的倫理あるいはイデオロギーであり、多くの被支配人種集団の科学者も陥ってしまっている。黒人言語学者ジニーバ・スミーザーマンが指摘するように、研究行為は権力行為そのものである。その認識が無ければ、科学や教育によって経済政治的弱者の真の救済策を講じることは不可能であろう。言語行為や言語教育が社会的、経済政治的利害に由来する行為である以上、その前提からして言語科学は決して非経済政治的の行為には成り得ない。言語科学者は、自身の構築した知識体系の実社会への、とりわけ被支配人種集団を含む弱者への経済政治的影響を常に念頭を置き、自身が訓練を受けた分野自体に常に批判的な眼差しを注ぐことが求められる。現代の社会科学、人文科学で、とりわけ、「ネ

「イティブーノンネイティブ」パラダイムの中で矮小化されてきた「人種」概念の役割を正しく認識し、被支配人種集団の救済にも資する学問体系の構築を図るというより強い決意が、言語科学全般に求められている。

注

- 1) 英語以外の言語、たとえば、日本語「ネイティブ」となると、人種概念との関連性やその意味合いも変化するため、ここではあくまで英語「ネイティブ」のみを射程に入れる。
- 2) Cooper (1989)、石川 (2017) を参照。
- 3) 肌の色に基づく議論を展開すると、とくにヨーロッパ系知識人から本質主義あるいは人種主義である、または似非科学であると批判を招くことがある。その一方で、この人々は、自身が数世紀にわたって構築してきた本質主義的人種主義ディスコースと社会構造の恩恵に現在も与っている。本稿は、まさにこの点に対しての言語学の立場からの批判的考察である。
- 4) TOEIC、TOEFLなどでは英語の多様化を図ってはいるものの、それらは白人「ネイティブ」英語内の多様性に過ぎない。
- 5) 確かに、人種問題のみに帰する問題ではない。しかし、社会科学等では人種は忌避される傾向にあり、階級、民族や性差が強調されてきた。白人、黒人に横断的に存在する問題として語ることで、人種差別の深刻さが覆い隠されていることに注目する必要がある (e.g. Deutsch 1965; Labov 1969)。
- 6) 筆者の白人の知人二人は一人がフランス語を「母語」とし、もう一人はポルトガル語を「母語」としている。二人は、白人「ネイティブ」を外国語教育ブランドとしてほぼ排他的に雇用する日本の教育機関で英語教員として勤務している。市場主義イデオロギーにしたがえば、「消費者である学生、保護者のニーズに応えての結果である」と主張する人々もいるかもしれない。しかしながら、この行為が内面化された人種主義を基盤とし、また人種主義を再生産しているという現実を目を背けるべきではない。

参考文献

- Alim, H. Samy and Geneva Smitherman. 2012. *Articulate While Black: Barack Obama, Language, and Race in the U.S.* New York: Oxford University Press.
- Arno, Robert F. Ed. 1980. *Philanthropy and Cultural Imperialism: The Foundations at Home and Abroad.* Bloomington, IN: Indiana University Press.
- Baugh, John. 1979. "A Re-Examination of the Black English Copula." *Working Papers in Sociolinguistics* 66: 1-39.
- . 1983a. "A Survey of Afro-American English." *Annual Review of Anthropology* 12: 335-354.
- . 1983b. *Black Street Speech: Its History, Structure, and Survival.* Austin: University of Texas Press.
- Bickerton, Derek. 1975. *Dynamics of a Creole System.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Bonilla-Silva, Eduardo. 2001. *White Supremacy and Racism in the Post-Civil Rights Era.* Boulder, CO: Lynne Rienner.
- Braine, George. 1999. *Non-Native Educators in English Language Teaching.* New York: Routledge.
- Canagarajah, A. Suresh. 2013. *Translingual Practice: Global Englishes and Cosmopolitan Relations.* London: Routledge.
- Center for Applied Linguistics (Charles A. Ferguson). 1959. *Proceedings of the Conference on Teaching English Abroad, May 1959.* Washington D.C.: Center for Applied Linguistics.
- Chomsky, Noam. 1957. *Syntactic Structures.* The Hague: Mouton.
- Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax.* Cambridge, US: M.I.T. Press.
- Cooper, Robert L. 1989. *Language Planning and Social Change.* Cambridge: Cambridge University Press.
- Curtis, Andy, and Mary Romney. Eds. 2010. *Color, Race, and English Language Teaching: Shades of Meaning.* Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Delgado, Richard and Jean Stefancic. 2017. *Critical Race Theory.* Third Edition. New York: New York University Press.

- Deutsch, Martin. 1965. "The Role of Social Class in Language Development and Cognition." Paper presented at the 1964 annual meeting of the American Orthopsychiatric Association, Chicago, Illinois. *American Journal of Orthopsychiatry* 35 (1): 78-88.
- Galtung, Johan. 1980. *The True Worlds: A Transnational Perspective*. New York: The Free Press.
- Fishman, Joshua A. 1970. *Sociolinguistics: A Brief Introduction*. Rowley, MA: Newbury House Publishers.
- Fishman, Joshua A., Charles A. Ferguson, and Jyotirindra Das Gupta. Eds. 1968. *Language Problems of Developing Nations*. New York: Wiley.
- Halliday, Michael Alexander Kirkwood, Angus McIntosh, and Peter Strevens. 1964. *The Linguistic Sciences and Language Teaching*. London: Longman.
- Haugen, Einar. 1966. "Linguistics and Language Planning." Ed. William Bright. *Sociolinguistics: Proceedings of the UCLA Sociolinguistics Conference, 1964*. The Hague: Mouton, pp. 50-71.
- 本名信行『英語はアジアを結ぶ』玉川大学出版部, 2006年.
- Horn, Winston V. 2007 (1997). "Africology: A Discipline of the Twenty-First Century." Ed. Nathaniel Norment, Jr. *The African American Studies Reader*. Second Edition. Durham, NC: Carolina Academic Press, pp. 411-419.
- Howatt, Anthony Philip Reid. 1984. *A History of English Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- 石川慎一郎『ベーシック応用言語学』ひつじ書房, 2017年.
- Jenkins, Jennifer. 2015. *Global Englishes: A Resource Book for Students*. London: Routledge.
- Kachru, Braj B. Ed. 1982. *The Other Tongue: English across Cultures*. Urbana, IL: University of Illinois Press.
- . 1985. "Standards, Codification and Sociolinguistic Realism: The English Language in the Outer Circle." Eds. Randolph Quirk and H.G. Widdowson. *English in the World: Teaching and Learning the Language and Literatures*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 11-30.

- . 1992. “Teaching World Englishes.” Ed. Braj B. Kachru. *The Other Tongue: English across Cultures*. Second Edition. Urbana, IL: University of Illinois Press, pp. 355-366.
- Kirkpatrick, Andy. 2007. *World Englishes: Implications for International Communication and English Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Krashen, Stephen D. 1982. *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Oxford: Pergamon.
- Kubota, Ryuko and Angel Lin. 2006. “Race and TESOL: Introduction to Concepts and Theories.” *TESOL Quarterly* 40 (3): 471-493.
- Krohn, Roger G. 1980. “Introduction.” Eds. Karin D. Knorr, Roger Krohn, and Richard Whitley. *The Social Process of Scientific Investigation*. Dordrecht, Holland: D. Reidel Publishing Company, pp. vii-xxvi.
- Labov, William. 1969. *The Study of Nonstandard English*. Urbana, IL: National Council of Teachers of English.
- Labov, William, Paul Cohen, and Clarence Robins. 1965. *A Preliminary Study of the Non-standard English of Negro and Puerto Rican Speakers in New York City*. Cooperative Research Project No. 3091. Washington, D.C.: Educational Research Information Center.
- Lange, Claudia, Ursula Achefer, and Göran Wolf. Eds. 2010. *Linguistics, Ideology and the Discourse of Linguistic Nationalism*. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Liu, Jun. 1999. “Nonnative-English-Speaking Professionals in TESOL.” *TESOL Quarterly* 33 (1): 85-102.
- 町田健「訳者あとがき」町田健訳, ノーム・チョムスキー著『言語と精神』河出書房新社, 2011年, 351-357頁.
- Marx, Karl and Frederick Engels. 2001 (1846). *The German Ideology: Part One*. Edited and with an Introduction by C. J. Arthur. London: Electric Book Co.
- McArthur, Tom. 1998. *The English Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McGrew, Teron. 1997. “The History of Residential Segregation in the United States and Title VIII.” *The Black Scholar* 27 (2): 22-30.
- Miles, Robert and Malcolm Brown. 2003. *Racism*. Second Edition. London: Routledge.

- Minamoto, Kunihiro. 2017. "Ebonics and Dr. Ernie Adolphus Smith: Toward a Comparative and Holistic Paradigm in Black Linguistics." A Doctoral Dissertation Submitted to African American and African Studies, Michigan State University.
- 源邦彦「黒人言語学史にみる人種主義の変遷—リベラリズム・ディスコース」『言語社会』第13号, 2019年, 266-279頁.
- 源邦彦「黒人の母語と欠陥英語論—利害一致論からの一考察」『年報カルチュラル・スタディーズ』第8号, 2020年, 127-150頁.
- Nero, Shondel J. 2010. "An Exceptional Voice: Working as a TESOL Professional of Color." Eds. Andy Curtis and Mary Romney. *Color, Race, and English Language Teaching: Shades of Meaning*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, pp. 23-48.
- Newmeyer, Frederick J. 1988. *The Politics of Linguistics*. Chicago: The University of Chicago Press.
- O'Grady, William, Michael Dobrovolsky, and Mark Aronoff. Eds. 1993. *Contemporary Linguistics: An Introduction*. 2nd Edition. New York: St. Martin's Press.
- 大平未央子「ネイティブスピーカー再考」野呂香代子, 山下仁(編)『「正しさ」への問い—批判的社会言語学の試み』2001年, 三元社, 85-110頁.
- Phillipson, Robert. 1992. *Linguistic Imperialism*. Oxford: Oxford University Press.
- Pinker, Steven. 2007. *The Language Instinct*. New York: Harper Perennial Modern Classics.
- Poliakov, Léon. 1971. *Le Mythe Aryen: Essai sur les Sources du Racisme et des Nationalismes*. Paris: Calmann-Lévy.
- Quirk, Randolph. 1990. "Language Varieties and Standard Language." *English Today* 21 (6, 1): 3-10.
- Rannut, Mart, Tove Skutnabb-Kangas, and Robert Phillipson. Eds. 1994. *Linguistic Human Rights: Overcoming Linguistic Discrimination*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Richards, Jack C. "Social Aspects of Language Learning." Paper presented at the Sixth Annual TESOL Convention, Washington, D.C. February 28, 1972.
- Rickford, John R. 2005. "Using the Vernacular to Teach the Standard." Eds. David J. Ramirez, et al. *Ebonics: The Urban Education Debate*. Second Edition. Clevedon,

- England: Multilingual Matters, pp. 18-40.
- Rojas, Fabio. 2007. *From Black Power to Black Studies: How a Radical Social Movement Became an Academic Discipline*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Scheurich, James J. 1997. *Research Method in the Postmodern*. London: Falmer Press.
- Selinker, Larry. 1972. "INTERLANGUAGE." *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching* 10 (1-4): 209-232.
- Skutnabb-Kangas, Tove and Robert Phillipson. 1989. "'Mother Tongue': The Theoretical and Sociopolitical Construction of a Concept." Ed. Ulrich Ammon. *Status and Function of Languages and Language Varieties*. Berlin: de Gruyter, pp. 450-477.
- Smedley, Audrey, and Brian D. Smedley. 2012. *Race in North America: Origin and Evolution of a Worldview*. Fourth Edition. Boulder, CO: Westview Press.
- Smith, Larry E. 1976. "Readings in English as an International Language." *RELC Journal* 7(2): 43-44.
- Smitherman, Geneva. 2000. "Introduction: From Ghetto Lady to Critical Linguist." Ed. Geneva Smitherman. *Talkin That Talk: Language, Culture, and Education in African America*. New York: Routledge, pp. 1-10.
- Stewart, William. 1965. "Urban Negro Speech: Sociolinguistic Factors Affecting English Teaching." Eds. Roger W. Shuy, Alva L. Davis, and Robert F. Hogan. *Social Dialects and Language Learning*. Urbana, IL: National Council of Teachers of English, pp. 10-18.
- 鈴木孝夫『日本人はなぜ英語ができないか』岩波書店、1999年。
- 田中里奈「日本語教育における「ネイティブ」/「ノンネイティブ」概念—言語学研究および言語教育における関連文献のレビューから」『言語文化教育研究』11号、2013年、95-111頁。
- 安田敏朗『日本語学は科学か—佐久間鼎とその時代』三元社、2004年。